

説経と谷ノ者

— 『せつきやうかるかや』、『中将姫御本地』から

内藤 久義

一 はじめに

日本の中世末期から近世初期にかけて隆盛した説経は、竹製の箏を伴奏楽器として仏教の唱導や民間説話をモチーフに取り込んだ語り物芸能であるが、その基層には漂泊芸能者の記憶とも言うべき差別や排除の事象が横たわり、細工・違例者・盲目

など当時の卑賤視された人々を物語の中に登場させてきた。説経『せつきやうかるかや』、『中将姫御本地』では、貴種に生まれた主人公が流離して谷に住み、遺体の埋葬、物乞いや花摘み、木採りなどをして糊口をしのご場面が描かれるが、これらの職掌は三昧聖や夏衆と呼ばれた死の穢れを担う人々に近似し、彼らは高野山においては谷ノ者とも呼ばれた。

中世から近世にかけての図像及び文献史料に谷ノ者が登場する。彼らは三つの異なる時代と場所、すなわち、中世の奈良、中世末から近世にかけての高野山、近世の江戸市中に記録され、

その関連は詳らかにされていないが、当時において卑賤視された人々であったことを史料からうかがい知ることが出来る。谷はその狭隘な閉鎖的地形から独自の文化が育まれ、高野や比叡のように宗教圏を形成するが、同時に谷は死や穢れが横溢する場でもある。各地に地獄谷、三昧谷、仏谷、捨谷などの地名が残るように、谷は死と穢れを表象するのである。

本稿では谷ノ者をイメージさせる職掌が、『せつきやうかるかや』や『中将姫御本地』に取り込まれていることに注目した。高野山の谷ノ者を射程に入れ、『せつきやうかるかや』、『中将姫御本地』に描かれる穢れや卑賤視される職掌が、これらの説経の物語及び谷という場においてどのような機能を果たしたのかを究明することにより、説経が単一の語り物芸能ではなく多様な被差別性を帯びた職掌を持ちながら、説経説き自身の差別と排除の記憶を、物語の中で再生しながら形成されたことを明確にしようと試みるものである。

二 説経とは

説経は民衆に向けた芸能であったが故に、文献に記録が残ることは少なかった。しかし中世末期から江戸時代初期の元禄頃まで人気を誇ったという説経は、何点かの正本を残している。現存する説経正本の最も古い年記を持つものが、『せつきやうかるかや』の寛永八年（一六三一）に刊行された太夫名記載のない「しやうるりや喜衛門板」によるものである。その後、『さんせう太夫』（寛永十六年頃・一六三九頃）、『せつきやうしんとく丸』（正保五年・一六四八）と続くが、説経正本は、文献上では江戸時代寛永年間までしか遡ることが出来ない。しかし、この芸能に対する当時の人々のイメージを伝える以下の史料がある。

天正五年（一五七七）頃に来日したポルトガルのイエズス会宣教師、ロドリゲスによる『日本大文典』（慶長九年—十三年、一六〇四—一六〇八）第三卷に「Xichiojiqui（七乞食）」¹の項があり、「日本人が物貰ひと言つてゐるもの、又は、日本で最も下賤な者共として軽蔑されてゐるものの七種類」の一つに説経は数えられ、さらに「Sasara xecquibô（ササラ説経）。喜捨を乞ふために、感動させる事をうたふもの一種」とある。また、元禄三年（一六九〇）刊の職業百科事典『人倫訓蒙図彙 卷七』²にも説経について述べられており、「門説経」の項には家の戸口の前で箏、三味線、胡弓を弾く三人の男の図を載せる。図

版の解説文には、「編木摺はわきて下品の一属也」と『日本大文典』同様に説経が卑俗な芸能であることを記している。

元禄頃の発行とされる遊里の風俗などを述べた『諸国遊里好色由来揃』³「説経之出所」には「もとは門せつきやうとて、伊勢乞食さ、らすりて、いひさまよひしを」の語が見え、また喜多村信節（筠庭）が著した『筠庭雑考』⁴の図版には、筵の上に大傘を立て箏を摺る男の周囲に男女が俯き聞き入っている様子と、門戸の前に立ち箏を摺る一人の男を描く。図説には「慶長年中の絵、ささら摺説経、人の門戸に立ちて語るを門説経といふ」とある。また同書には『人倫訓蒙図彙』の図を引き以下のように述べている。

自然居士などはさゝらをすり舞へりとぞ。又説法するものさゝらを用ひ、其れより和讃の如きうたひものに合はせたるが、果には浄りと変れり。浄るりは説経より出でしものなるべけれど、平家のうたひ物をも取りたる也。其後に至りては説経のうたより浄るりをもまねたる歟。

『日本大文典』は慶長年間、『人倫訓蒙図彙』や『諸国遊里好色由来揃』については、すでに江戸時代も九十年近くを過ぎた元禄期、『筠庭雑考』に至っては江戸後期に発行された本の記述であるが、所々に説経の源流やその変遷を垣間見せる。最も下賤な芸能の一種で感動させることをうたう説経は、「わきて下品の一属」であり、仏教の説法から発生した説経が、やがて平曲に影響され浄瑠璃へと変遷してゆくことを記すのである。

三 説経の先行研究

近代の説経に関する論考では柳田国男の「山莊太夫考」(大正四年・一九一五)⁵⁾が研究の端緒を開いた。柳田は森鷗外の小説「山椒大夫」が、自分のイメージする伝承と乖離することから、強欲な由良の長者を何故「山莊太夫」と呼んだのかという疑問を呈する。この物語を長者伝説と推論し、「山莊は自分の所謂ヒジリ的一种である。サンシヨのサンは「占や算」の算で、算者又は算所と書くのが命名の本意に當つて居るかと思ふ」とし、由良の長者が「山莊太夫」と呼ばれたのは、「あの話を語つてあるいた技芸員が、或算所の太夫であつたのが、いつの世にか曲の主人公の名と誤解せられたのである」と述べる。

林屋辰三郎が昭和三十年(一九五五)に発表した「『山椒大夫』の原像」⁶⁾は、柳田の論から踏み込み、山椒大夫という散所の長者が存在した可能性を問う。散所民は莊園領主に隷属し、さらに散所の長からも支配されるという二重の隷属関係があつたとした。

昭和四十五年に刊行された室木弥太郎『語り物(舞・説経・古浄瑠璃)の研究』⁷⁾によつて、説経の研究は大きく進展した。「関神社蟬丸文書」についての先駆的研究成果を示し、説経とは乞食の芸術であり彼ら説経説きは蟬丸を祖として信奉する乞食集団に属し、また説経説きたちを統轄した兵侍家についても詳述する。さらに室木の着眼は、説経の持つ職能が芸能だけでは

なく、死者の取り扱ひ、田畑や牢屋の番人等の賤業にも従事していたことを『諸国風俗問状答』や『雍州府志』などの近世史料から注目した。

説経作品集としては、横山重が編んだ『説経正本集』全三巻は四十六編の正本を掲出し、各巻それぞれに「附録」として、説経関連の絵巻や奈良絵本の詞章部分二十編を収録した。これは現在まで刊行された研究書の中で最大数の説経正本を収録しており、説経研究の基本テキストとなっている。その後、昭和四十八年に荒木繁・山本吉左右により『説経節』⁸⁾が東洋文庫から刊行された。注釈と作品解説・解題、また山本による説経語りの構造についての論稿も収載されている。昭和五十二年には室木弥太郎校注『新潮日本古典集成 説経集』⁹⁾も刊行された。

四 谷ノ者とは

谷ノ者の呼称は三つの異なる時代と場所に登場する。文献上の濫觴は中世の奈良で、ここでの谷ノ者は竹や木材の運搬を行っている。第二の谷ノ者は、中世末から近世にかけての高野山に現れ、彼らは遺体の埋葬や墓地の石塔修理などの土木作業、また警護、行列の先払いなど多岐にわたる職掌を持つ。第三は江戸時代後期の江戸市中で、伝馬町の牢屋を中心に犯罪者の連行、行刑に携わつた。谷ノ者は史料によつて、谷之者、谷の者、谷者、谷夫、谷下人、谷ノ宿ノ物などとも書かれているが、本稿

では「谷ノ者」と表記する¹¹。しかし、奈良、高野山、江戸のそれぞれの谷ノ者が、果たして同一の職業的ヒエラルヒーを有する卑賤視された人々なのかは熟考しなければならない。

これまで研究の少なかった谷ノ者であるが、高野山の谷ノ者については、近年『高野山文書』が高野山・金剛峯寺からの資料提供により、「和歌山県の部落史」編纂会によって『和歌山の部落史史料編 高野山文書』¹²として二〇一一年に刊行され、高野山の谷ノ者の輪郭が明らかになりつつある。説経は語り物芸能だけではなく、竹細工、警護、埋葬など当時の賤業とも関わり、芸能という括りだけでは語ることは出来ない。谷ノ者の職掌と説経が担ったもう一方の職掌とは多分に重なる部分があり、最も古い説経正本とされる『せつきやうかるかや』、また『中将姫御本地』の中に谷ノ者を想起させる場面が描かれ、彼らは被差別の象徴空間である谷に集い、花を摘んで糊口をしのぎ、また火葬・埋葬を行う。谷ノ者の特徴の一つに彼らは竹と関わった。竹は古代よりそれを採取、細工、販売する者に被差別の記号を付して来た。説経は芸態の中に竹の楽器である篳箏を象徴として持した。また奈良の谷ノ者は竹の運搬を行い、高野山の谷ノ者は職掌の一つとして行列の先払いに際して竹の杖を携える。江戸の谷ノ者においては、行刑の用具として竹鋸を配置し、『さんせう太夫』や『をくり』には、主人公を加虐した者に対してこれを用いて首を挽く描写がある。それぞれの谷ノ者は竹に表象される職能を持つが、紙幅の都合もあり本稿では高野山の谷ノ者を中心に論を展開してゆく。

五 高野山の谷ノ者先行研究

高野山の谷ノ者に触れた江戸期のものである、本居内遠らが編んだ『紀伊続風土記』（天保十年・一八三九）がある。同書は紀州藩の藩命を受けて作られた紀伊国の地誌であるが、「高野山之部學侶」の項で谷ノ者について触れている。同項では高野山内に集住する者たちの職掌を挙げ、谷ノ者とは新坊（隠坊）であるとし、ここでの谷ノ者は、主に隠坊、三味聖と呼ばれる埋葬に関わるもの、また墓石の修繕、高野山奥の院骨堂の清掃、寺務行列の先払いを行っていたことが記される。

大正期になると、喜田貞吉が谷ノ者に注目をする。『民族と歴史』第三卷第六号（大正九年・一九二〇）に「声聞師考」を掲載し谷ノ者に触れる。その後も『民族と歴史』第六卷第五号（大正十年）、『社会史研究（民族と歴史改題）』第十卷第三号（大正十二年）でも高野山の谷ノ者が述べられる。

昭和三十八年に渡邊廣が『未開放部落の史的研究—紀州を中心として—』の中で「谷ノ者考」¹³を執筆した。渡邊は谷ノ者を土木の専門業者であるとし、散所・声聞師に類似すると述べ、高野山の谷ノ者については穢多の仲間ではなかったとしている。また室木も前述した『語り物（舞・説経・古浄瑠璃）の研究』で谷ノ者に触れているが、葬送の仕事は谷の者の専業であり「谷の者は新坊谷とも東谷ともいわれる所に住み、下賤のものとされた」とい

う記述にとどまっている。二〇〇〇年代に入り、日野西眞定¹⁷が研究を先行する形で、山陰加春夫¹⁸、藤井寿一¹⁹らの論考が続いた。高野山の谷ノ者研究は、『和歌山の部落史 史料編 高野山文書』の刊行により、さらに詳細な姿が浮かび上がると思われる。

六 『高野山文書』と『紀伊統風土記』

前述した『高野山文書』『金剛三昧院文書』慶長七年（一六〇二）七月五日条「谷之者條々掟書案」²⁰を嚆矢とし、同書には多くの谷ノ者の記録が記されている。谷ノ者の記述を読み進めてゆくと、彼の集団が土木作業だけではなく、死や穢れにも関わっていたことが分かる。以下に『高野山文書』から谷ノ者の職掌を記述するものを抜き書きする。（※カッコ内年号は筆者による）

- ① 一同年（元禄六年）六月十八日、盜賊ヲ取逃シ候二付、当番谷之者榎本坊・泉音式人為過籠舎申付候、（略）
- ② 一同四年（宝永四年）亥六月、奥山院二而卒塔婆夜番之儀二付願書志通
- ③ 一同五年（正徳五年）二月五日、葬礼之節、穴堀料物・院々酒飯料御定被下度旨願書一通、谷年行事
- ④ （略）（正徳五年）一 御葬礼之節御穴掘料物之儀、（略）谷ヨリ罷出候人数も御寺相応ニ多少御座候、以御慈悲、谷之居住も仕る我々共之儀ニ御座候間、（略）
- ⑤ 一同三年（享保三年）閏十月廿五日、谷之者道造之儀二付願

出候二付、（略）

⑥ 一寛保元年七月廿五日、谷年行事先達而枯木・枯枝拾ヒ候儀免シ候所、（略）

⑦ 一同年（延享五年）九月廿五日、谷入口土橋掛替之材木願書志紙、谷年行事

⑧ 一戊四月（年号未詳）、善兵衛事二付、縄料并ニ殺害料減少被仰渡迷惑ニ存候間、慶長年中御定之通被仰付可被下旨願書志紙、谷年行事

谷ノ者の職掌は、警護、夜番、墓穴掘り、土木工事、枯木・枯枝拾い、罪人の捕縛・処刑、骨堂の清掃等多岐に渡り、高野山において、三昧聖・夏衆・木採道心・花摘道心と同様の機能を果たしている。ここで再び『紀伊統風土記』に注目したい。同書の「高野山之部學侶」『非事使』総論「附録」の箇所²²に、谷ノ者が登場する。同書では高野山の聖の事歴や居住地、類別を記し、「附録」では高野山域内に居住する者の職掌について、儒者、医師、道心者、佛師、佛絵師、大経師、経師、書林、大工、木挽、葺師、左官、彫刻師、鍛冶、張付師、塗師、飾師、把針者、珠数屋、豆腐屋、諸町人、山男、日雇、袖、檜皮剥、山奴、新坊、禿法師の順で紹介している。これらの職はヒエラルヒーによって順番付けられていることが考えられ、最後に記される「禿法師」とはハンセン病者である。谷ノ者は禿法師の一つ前の「新坊」の職分の中に述べられる。²³（※棟線筆者）

新房 又谷の者といふ。其居住の處を新坊谷とも東谷とも

云。大渡の橋より巽方壹町許廿四坊あり。其総堂は釈迦如来を本尊とし。弘法大師。行基菩薩。頼慶法印の木造を安置す。(略) 此山に移て後大師の命によりて葬送の事を勤む。俗にいふ隠坊筋目のものを剃て此黨に入る。(略) 諸法事の出仕の警固。寺家の夜番。各院墓所の守護を勤む。爾はあれとも其後数々の僧上の風萌す。此黨元來剃頭のみにて。至極の□□なれば。立付ようのものを著して青竹を持。寺務行列の先拂。其外諸向の警固を命す。よりて舊く法衣珠数などの沙汰なし。頼慶の縁ありて。彼□の内にては竊に直綴など著すとも聞ゆ。畢竟僧上にて沙汰の限にあらず。(略)

同書によれば、谷ノ者とは葬送における死体の処理や墓穴掘りを行う新坊(隠坊)のことであり、高野山で葬送に携わったとする。また葬送の仕事だけでなく、山内の警護や石塔の新造・修理にも関わるが、青竹を持ち寺務行列の先払いを行ったとあるように、竹を持つことが高野山谷ノ者の表徴でもある。高野山の事例ではないが、山路興造は、「さまざまな行事に駆り出される警護役が手にする竹の棒も、一方がさ、ら状に割れているのが原則」であると指摘する。⁽²⁴⁾ 大藤時彦は、備中では隠坊は死者の取り扱い及び非人番、また正月には村内に茶筌を配り歩いたので茶筌とも呼ばれ、竹細工を行っていたとした。⁽²⁵⁾ 江戸時代の出雲地方で、鉢屋は「郡巡り鉢屋」と称し、牢獄付近に配置されその監視を行い、下部組織の「村受鉢屋」は稼業として竹細工を行っていたことを倉光清六は述べる。⁽²⁶⁾ 高野山の谷ノ者が

葬送以外にも山内の警備を行ったことと同じく、村落内の監視を行う立場の者が竹細工を行う事例がある。

七 説経の持つ職掌

説経は各地を漂泊しながら、大道での興行や門付けを行うことから下級芸能とされてきたのである。しかし、最も下賤な者共して軽蔑された理由とは、説経が漂泊する語り物芸能であつただけではなく、芸能以外の常民が厭う様な職に携わつただけではないだろうか。説経は単に語り物芸能を行っていたのではなく、説経という名のもとに、多様な職掌を持っていたことを以下の史料から確認したい。

A 『諸国風俗問状答』屋代弘賢(文化十二年・一八一五)
(※棒線及びカッコ内筆者)

・「三河国吉田領風俗問状答」⁽²⁷⁾

(問) 乞食穢多云々

(答) ○サ、ラと云ふ者、又△説教者といふもの渥美郡山田村にあり、元來サ、ラは節季候、鳥追の類を職とし、又流行哥などうたひあるきて物をもらひ渡世とし、説教者は厄拂の類、又何事が今知りたる人なし。市中をよみあるき、或は三弦を弾て唄ひなどして、凡サ、ラに同じかりしとなり。尤常の百姓と交りて日待、庚申待などに出ることはなく、すべて百姓と交はせざりしとぞ。

B 「江戸寺社奉行方へ三井寺役人の口上覚」(文政十三年・一八三〇)²⁸⁾

説教と申候は、蟬丸宮附属之人々又は子孫散在仕、説教と相唱、糸竹舞踏治病施薬等を業とし、又勸善懲悪、惣而世間の利益二相成候儀を営、渡世仕候、其流二而于今香具師万歳戯場鳥追鉢叩放下番人等、

C 『駿国雜志』(文化十四年・一八一七)²⁹⁾

鰯村は、有渡郡、河の辺馬淵村にあり。一名説経村と云へり、是両村の小地名なり。是両村に説経と云者あり、里人呼びて鰯者と云ふ、即説経者成也。其始め久しうして詳らかならず。

中頃より其家業を転じ、操り芝居の坐元等を渡世とす、

吉田領に乞食穢多の他、ササラ摺り、茶筌作、院内、梓巫女の類は存するかとの問いに對して、「三河国吉田領風俗問状答」では、ササラ又は説教者と呼ばれる者がいて、様々な芸能や厄払いによつて物を乞い、その総称がササラであり説教者なのである。同様に「江戸寺社奉行方へ三井寺役人の口上覚」でも、芸能だけではなく、救病・施薬にも従事していたことが書かれる。医療関係の記述については疑問が残るが、番人などは説経だけでなく様々な芸能が携わつた。『駿国雜志』には、「鰯村」という説経者が集住した地区があり、操り芝居の座元に転じたところがあるが、説経は後に操り芝居と結びついていった経緯がある。駿河国の地誌である『駿国雜志』が書かれた頃には、すでに説経は衰退していたことが考えられ、鰯村の説経は、操り芝居の座元だけではなく、

燈心などの販売や、また牢番を行ったのである。

近年の研究では長野県伊那郡において、十九世紀前期に「鰯」と呼ばれる(組)が存在し、明治初期まで存続していたことを吉田ゆり子が述べている³⁰⁾。鰯は正月の万歳、芝居、操りなどの芸能の他、葬式の警備、埋葬、村の巡回や行倒れを片付ける下役と呼ばれる仕事を行い、穢れと関わる周縁的な存在であったという。

説経は漂泊する語り物芸能のイメージが強い。しかし史料から説経は多種の芸能を行い、さらに番人や燈心などの販売にも携わつていたことが分かる。これらの職掌が説経発生当時からのものであるのか、近世に入り説経が衰退して以降行われたのかは定かではない。すでに室木が述べているが、説経とは語り物だけではなく、多様な芸能及び穢れに関わる職掌を包含した、周縁的存在の総体としての呼称と考えるべきではないだろうか。

八 『中将姫御本地』と『せつきやうかるかや』

説経は本地の構造を持つ貴種流離譚といつてよいかもしれない。古い時代の説経にこの傾向は強く、特徴として物語の冒頭で本地が語られる。本地とは神仏の本源、すなわち神や仏が人であったときの子細を述べる。その他にも、過剰な敬語表現や独特の語り口(一てに等)、旅の途上の地名の羅列、また後年は浄瑠璃の影響を受け物語の構成は六段になるが、古い時代の説経は上中下の三段のものが多く、『せつきやうかるかや』はこの

特色を明確にするが、『中将姫御本地』の冒頭で語られるのは当麻曼茶羅の由来であり本地とは言えない。また構成も六段となっているが、貴種流離というスタイルは変わっていない。

説経における貴種流離には二つのタイプがあると考ええる。貴人の暮らしから呪いや讒言、または自らの意志により、家を出て賤民同様の生活に零落するが、救済者の手を経て、ある〈場〉で再生・復活を遂げ、華々しく飛躍・出世し、自分を陥れた者たちに徹底した復讐を行い、最後には神仏へと祀られる。このタイプに『さんせう太夫』、『せつきやうしんとく丸』、『をぐり』などが挙げられよう。

もう一つのタイプとして、同じく貴種から流離し、苦難を救済者によつて救われ再生の場を経るが、その後出世も飛躍も復讐もなく、ひたすら宗教世界へ深く入り込んでゆく物語である。『せつきやうかるかや』、『中将姫御本地』がそれで、少し異なるが『まつら長じや』や『あいご若』なども同型であろう。『まつら長じや』は松谷に住む長者であったが、主の死後零落して、残された妻と娘は落穂を拾って暮らす。娘の小夜姫は亡き父の菩提を弔うため、大蛇の生贄として自ら身を売るが、法華経を誦することで救われる。『あいご若』には谷という名称は出てこないが、貴人の暮らしから流離し、四条河原の細工の家や志賀の峠、穴太の里など境界的な場所を彷徨う。主人公の愛護の若は、生涯を全うすることなく自死してしまうが、身を投げる「きりうが滝」は、比叡の谷あい深くにある淀んだ淵を思い起こさ

せる。『まつら長じや』、『あいご若』の主人公はいずれも宗教世界には入らず復讐は行われぬが、これらの物語は谷が重要なポイントとなり、『中将姫御本地』はひばり山の谷、『せつきやうかるかや』では高野山の谷が舞台となる。

『中将姫御本地』は当麻曼茶羅縁起を源として、『古今著聞集』や『聖徳太子拾遺記』、『元亨釈書』に同型の話を載せ、平安時代末から鎌倉初期には、横佩大納言とその娘の話が定着していたことを宮崎圓遵は指摘する³²⁾。その後、当麻曼茶羅は善慧房証空や門下の実信房蓮生らが流布し³³⁾、中将姫説話はやがて継子いじめ譚を加え、能・歌舞伎・浄瑠璃・狂言などにも取り込まれる³⁴⁾。

『せつきやうかるかや』については、高野山萱堂（荊萱堂）における時宗や、『大塔物語』の影響を考えなければならぬ。『高野山春秋編年輯録』には、一遍上人が建治元年（一二七五）七月、高野に詣て霊夢を告げられたと記す³⁵⁾。その後も代々の遊行上人は高野に参籠し、やがて萱堂の高野聖を併合して、高野山萱堂は時宗と緊密な関係を持つ。応永七年（一四〇〇）の信濃守護職小笠原長秀と諸豪族の戦闘を記した『大塔物語』に、善光寺の時宗妻戸衆が登場する。妻戸衆は小笠原氏敗北後、常素入道と子息八郎の最後を伝えるため遺族を訪ねて行くが、善光寺には戻らず高野山に定着する。その後、八郎の母は善光寺時宗妻戸衆となり、勝者の高坂入道も高野山に上り萱堂聖になったという。

『中将姫御本地』、『せつきやうかるかや』は、創作背景も主人公の出自も異なる。『中将姫御本地』は、当麻寺の縁起に継子い

じめ譚を習合し、さらに説経ではひばり山の谷という場において、物乞いによって中将姫は養われる。『中将姫御本地』鱗形屋板の挿絵に中将姫が写経をする姿を描くが、姫は目だけを出し頭部から首元まで覆う覆面をしている。これは写経をする際、尊い経文に息がかからないための覆面弧であると考えられるが、通常は鼻から顎にかけて覆う、大きめのマスクのような布が使用される。「法然上人絵伝」では、このマスクタイプの覆面弧で写経する僧を描くが、『中将姫御本地』の挿絵の覆面弧は、まるで「一遍聖絵」に描かれるハンセン病者や長使が被る覆面と同様に描写されるのである。中・近世の写経において、他にこのような覆面が使用されていた例があるのか不明であるが、谷に住み物乞いや落穂拾いの糧で露命を繋ぐ中将姫に、被差別の記号であった覆面が徴されたとは考えられないだろうか。

また寛永八年しやうるりや喜衛門板『せつきやうかるかや』の挿絵では、亡くなった妻の遺骸を輿に乗せ、苺萱道心と息子の石動丸が運搬する場面が描かれる。奈良絵本では、妻を火葬に付す描写もあり、「浄不浄を嫌わず」の通り死や穢れの接触を厭わない時宗の姿が垣間見えるのである。

九 被差別の記憶の再生

『せつきやうかるかや』、『中将姫御本地』の主人公は、貴人の世界から谷に流離し穢れに携わる。中将姫自身は木採りも物乞い

もしていないが、それによって扶育され、谷において姫を養った男が死んだとき遺体の埋葬を手伝う。『せつきやうかるかや』の石動丸と苺萱道心の出会いの場面では、苺萱は花を摘んだ帰りであり、また妻の亡骸を埋葬する。ここには花摘道心や木採道心、三味聖の姿が投影され、高野山において谷ノ者と呼ばれた人々のイメージとも重なる。彼らは前述したように、埋葬、土木、警護、先払い、枯枝拾い、罪人の捕縛・処刑など多岐に渡る職掌を持った。この二つの物語に共通するのは、谷を舞台としていること、主人公が出世及び自分を貶めた者に復讐を行わず、ひたすら宗教という内的な世界へ没入してゆく点にある。苺萱道心も石動丸も世の栄達とは無縁に宗教者として生を全うし、同じく中将姫も宗教者として日々祈り没してゆく。苺萱と石動丸は親子地蔵として祀られるが、三者の死後には紫雲が棚引くだけである。

一方、谷を舞台としない『さんせう太夫』、『せつきやうしんとく丸』、『をくり』では、同様に貴種から流離し苦難を経て、救済者の手を借り再生・復活の場へたどり着き、そこに接触することにより華々しく出世する。そして自分や身内を加虐した者に対して、竹の鋸で首を挽き、簀巻にして水に沈め殺す。外の世界に向かう物語には、出世と復讐が対になっているのである。同じ説経の物語でありながら、なぜこのような差異が生まれたのであろうか。

先行研究や近世史料には、多くが説経の源泉は寺社の教説にあることを指摘する。唱導師が語る仏典の「説教」があり、さらに声明や和讃、平曲が取り入れられ芸能化し、「説経」となっ

ていったとする。荒木繁は、説経は本来語り物ではなく、僧侶が経典を講説する説法であったが、教化の対象が庶民の場合は、仏典講説のさい、比喩、因縁など説話の部分が耳に入りやすく、そこから文学的（唱導文学）なものが成長していったと述べる⁽³⁷⁾。民衆教化の理由の一つとして、古代末から中世にかけて、寺院はこれまで保護者であった貴族階級が没落したため、新たに教線を庶民に広げてゆく必要に迫られたとした。

しかし説経とは仏教の教えを民衆にわかりやすく伝えるという目的のもとに、身体性を伴って寺社の教説から芸能化したのであるうか。説経の物語世界は中世の仏教を母体とするにはあまりに利他の思想からは遠い位置にあるものも多い。自己の願望を叶えるために神仏をも利用し果ては恫喝を行い、実の親を殺すことも厭わない物語が展開されるものもある。説経は多分に寺社で行われた教説を取り込みながらも、その発生は別の場所にあったのではないだろうか。

特に古い時代の正本に描かれる残虐性や土俗の匂い、また復讐という肯定的な悪は仏教世界とは乖離する。郡司正勝は寺社の説教が声聞師の手に渡り門説経となったとするが、説経は散所（声聞師）や周辺の芸能者を創作の母体として生まれ、仏教説話など寺院の教説の要素を取り入れながら独自の世界観を構築していったと考える。説経の物語に展開される散所での生活を想起させる記述、抑圧された人々の解放への希求、被差別的職掌を担う者ハンセン病者、また漂泊の旅や迫害、それに救いの手を差し伸べ

る卑賤視された人々、そして高野山の谷ノ者をイメージさせる登場人物たちをどのように考えるべきであろうか。

結び

柳田国男は山莊（山椒）大夫とは散（算）所の大夫であり、この物語を散所民が持ち運んだと述べ、林屋辰三郎は山椒大夫自身が散所の長者であったと指摘する。説経は散所及びその周辺人々の手によって物語として編まれ、そこに仏教説話や比喩・因縁など教説的部分が付加されて説経の祖型を成していったのではないか。また伝承されてきた説話に声聞師たちの卑賤視された体験や記憶が付与されたとも考えられる。さらに『せつきやうかるかや』、『中将姫御本地』には、谷ノ者の残像が投影されるのである。

谷という生と死、聖と穢れが濃密に収斂された空間によって醸造された物語が、『せつきやうかるかや』であり『中将姫御本地』であったのではないだろうか。谷に住まう穢れを帯びた人々である谷ノ者の記憶が、萱堂や当麻寺の説話の中に再生される一つの物語を創出し、それが声聞師たちの手に渡った。これを証明できる史料がない以上あくまで推論の域を出ない。

谷ノ者とは他の卑賤視された人々とも異なる位置に置かれたのかもしれない。谷を舞台としない説経は、被差別民と同等の暮らしにまで零落しながらやがて出世し、自分たちを排除した者たちに復讐を行い、富貴の身分となり幸せに暮らすというス

トリーを持つ。しかし谷を舞台とした物語は、谷へ流離し谷の中で穢れを帯び、復讐も出世も富も得ず、宗教世界の中で寿命という死をもって完結する。そこには谷という聖と穢れが混交する空間で、穢れの部分を担った谷ノ者の生が反映されているのである。

注

- (1) J・ロドリゲス原著 土井忠生訳注『日本大文典』一九五五 三省堂八〇六一―八〇七頁。島正三編『ロドリゲス 日本大文典』一九六九 文化書房博文社 四五〇頁
- (2) 朝倉治彦校注『東洋文庫519 人倫訓蒙図彙』一九九〇 平凡社 二八三頁
- (3) 蘇武緑郎編『花街風俗叢書 諸国遊里風俗篇(上)』一九三一 大鳳閣書房 六六頁
- (4) 日本随筆大成編集部『日本随筆大成(第二期)』8 一九七四 吉川弘文館
- (5) 柳田国男『山莊太夫考』『定本 柳田国男集 第七卷』一九六二 筑摩書房 一〇八―一二三頁
- (6) 林屋辰三郎『山椒大夫』の原像』『文學』二十二 一九五四 岩波書店 一六四頁
- (7) 室木弥太郎『語り物(舞・説経・古浄瑠璃)の研究』一九七〇 風間書房
- (8) 横山重編『説経正本集』一九六八 新潮社。正本四十六編とは、四十六通りのストーリーがあるのではなく、例えば『さんせう太夫』では、「天下一説経興七郎正本(『さんせう太夫』)」「天下一説経七郎正本」、「天下一説経佐渡七太夫正本(『せつきやうさんせう太夫』)」、「寛文七年山本久兵衛板(『さんせう太夫』)」、「佐渡七太夫豊孝正本(『山庄太輔』)」のように、同一題材であるが説経説きや板元の異なる正本もすべてカウントした数である。テーマのみを数えるならば三十七編となる。荒木繁・山本吉左右編注『東洋文庫243 説経節』一九七三 平凡社
- (9) 室木弥太郎校注『新潮日本古典集成 説経集』一九七七 新潮社
- (10) 谷ノ者と表記したのは、この呼称が登場する初出史料『大乘院寺社雜事記』長祿二年(一四五八) 閏正月条に谷ノ者と記されていたことによる。
- (11) 『高野山文書』では谷之者と表記している。
- (12) 『紀伊続風土記』では谷之者または谷の者と表記している。
- (13) 『和歌山の部落史編纂会編』和歌山の部落史 史料編 高野山文書 二〇一一 明石書店
- (14) 『渡邊廣』未開放部落の史的研究―紀州を中心として― 一九六三 吉川弘文館
- (15) 7に同じ。『語り物(舞・説経・古浄瑠璃)の研究』二七八頁
- (16) 日野西眞定『高野山三昧聖の研究』細川涼一編『三昧聖の研究』二〇〇一 碩文社
- (17) 山陰加春夫『中世高野山における平等と差別』『部落解放』
- (18)

- 一月増刊号 二〇一三 解放出版社
- (19) 藤井寿一「高野山「谷之者」の身分意識」畑中敏之他編『差別とアイデンティティ』二〇一三 阿吽社。藤井寿一「高野山の被差別民 谷之者を中心に」『部落解放』一月増刊号 二〇一三 解放出版社
- (20) 高野山史編纂所編『高野山文書 第五卷』一九三六 高野山文書刊行会 三五一一―三五二頁
- (21) ①⑧ 和歌山の部落史編纂会編『和歌山の部落史 史料編 高野山文書』二〇一一 明石書店
- (22) 統真言宗全書刊行会編『統真言宗全書』第三十九一九八二 統真言宗全書刊行会。同書には一部伏字として空欄で記されている。
- (23) 同書には一部伏字になっているが他の史料と照合できる箇所は筆者が文字を記入した。
- (24) 山路興造『翁の座―芸能民たちの中世』一九九〇 平凡社 八〇頁
- (25) 大藤時彦『隠坊』『日本大百科全書 4』一九八五 小学館 五二六頁
- (26) 倉光清六「出雲地方の鉢屋」『民族と歴史』第六卷第三号 一九二一 日本学術普及会 三一頁
- (27) 中山太郎編『校訂 諸国風俗問状答』一九八九(復刻)バルトス社 二五三頁。竹内利美他編『日本庶民生活史料集成 第九卷 風俗』『諸国風俗問状答』一九六九 三一書房 六一七頁
- (28) この項については室木弥太郎『語り物(舞・説経・古浄瑠璃)の研究』二二七頁を参照している。
- (29) 阿部正信『駿国雑志 一』一九七五 吉見書店 二七二―二七三頁
- (30) 吉田ゆり子「簾」―周縁化された芸能者と地域社会―『思想』8 二〇一四 岩波書店
- (31) 7に同じ。室木弥太郎『語り物(舞・説経・古浄瑠璃)の研究』二一八頁
- (32) 宮崎圓遵「中将姫説話の成立」『宮崎圓遵著作集第七卷 仏教文化史の研究』一九九〇 思文閣出版
- (33) (32)に同じ。「中将姫説話の成立」『宮崎圓遵著作集第七卷 仏教文化史の研究』三四六―三四七頁
- (34) 横山重編「中将姫御本地解題」『説経正本集』第三 一九六八 角川書店 五五八―五五九頁
- (35) 日野西眞定編『新校 高野山春秋編年輯録 贈訂版』一九九一 名著出版 一七三頁
- (36) 塙保己一編『続群書類従・第二十一輯下 合戦部』一九二五 続群書類従完成会
- (37) 荒木繁「解説・解題」荒木繁・山本吉左右編注『東洋文庫 243 説経節』一九七三平凡社 三二四頁
- (38) 郡司正勝「説経節」国劇向上会編『藝能辞典』一九五三 東京堂出版
- (ないとう・ひさよし) 東京大学大学院